

## 埼玉親善大使・フィンドレー大学平成 27 年度派遣奨学生 奨学終了報告書

徳永美友

フィンドレーでの思い出が走馬灯のように頭の中を駆け巡ります。初めての長期留学に期待をいっぱい胸に詰めて、埼玉県の代表であるという責任感を抱えて、2015年8月11日、私はフィンドレーに到着しました。綺麗なお花に溢れるキャンパス、巨大なスーパーマーケット、新しい自分の部屋、目に映るものは全て輝いていました。

私が海外に行きたいと最初に思ったのは英会話教室に通っていた小学5年生の時でした。それから11年、好奇心だけではなく、将来国際協力に貢献したい、そのためには語学力の向上や異文化理解は必要不可欠という強い想いの下、遂に留学する夢が叶いました。

フィンドレーでの生活は、友達や家族と離れ、異文化にどっぷり漬かり日々新しいことを学ぶ充実した毎日でした。キャンパス内の24時間空いている施設に、距離が近く気さくに何でも質問ができる教授、そしてキャンパス内にある寮、フィンドレーは勉強をするのに最適な環境でした。その新しい環境や、現地で出会った人々から1人1人の個性を尊重する大切さを感じました。

私が留学生活中所属していたブラスバンドでは、学生からお年寄りまで幅広い年齢層の人が参加していました。私が所属していたバンドが大会には参加しないということもあり、曲の完成度を発表会の日まで高めようという思いがあまり感じられませんでした。所属してから最後の演奏会までずっと、指揮を見る人が少ないため演奏が始まるにつれどんどん落ちていくテンポや合わないリズムとチューニングに戸惑っていました。曲の完成度の高さよりも、ここにいる人は自分が演奏を楽しむことを大切にしているということに気付きながらも複雑な気持ちでした。特に最後の演奏会で演奏した曲は難易度が高く、本番前日のリハーサルでも曲が止まってしまうことがありました。しかし、リハーサルは時間ぴったりに終わってしまい、結局その個所をもう一度練習するといったこともなく心は不安でいっぱいでした。本番当日、一分一秒集中し、精いっぱい演奏しました。決してきれいに揃った演奏ができたわけではありませんが、客席からはスタンディングオベーションが起こり、いつまでも拍手がなりやみませんでした。ステージから見えるお客さんの笑顔、ステージ上のバンドメンバーの笑顔、私たちに微笑み観客にお辞儀をする指揮者の先生。私はその時、自分が演奏を楽しめて、その上お客さんがこんなにも笑顔になってくれるということを感じたことだと思いました。私がクラリネットを演奏するときは常に曲の完成度の高さを求め、そうすることでバンド仲間と切磋琢磨してきました。なので、こちらのブラスバンドでは個人の演奏の仕方を尊重しいかに音楽を自分が楽しめるかに焦点が置かれていることに最初は困惑しましたが、客席からのスタンディングオベーションと鳴りやまない拍手に音楽との新しい向き合い方に気付かされました。そして、自分の好きな演奏の仕方でも音楽を楽しめること、それを尊重す

る環境があるところにアメリカらしさを感じました。

また、私が受講していた政治学では、レポートの課題が多く出されました。米国愛国者法はジョン・ロックとトーマス・ホ布斯、どちらの思想により影響された法になっているか、アメリカの大統領にとって大切な要素は何か、アメリカのそれぞれのニュース番組におけるバイアスなど、テーマも決して私にとって簡単なものではなく大変苦勞しました。なんとか毎回書き上げていたものの、決して整ったまとまりのある文章は書いていませんでした。しかし、教授はいつも9割近くの評価をつけてくれました。民俗学のレポートでも同じです。テーマに対して何をどう書いていいかわからなくて質問する私に教授は、「自分の意見を好きなように書けばいいから正解はないよ。」と言葉をかけてくれました。個人を尊重し、自分の考えを自由に述べることを評価されるところにアメリカが自由の国と言われる意味がわかった気がします。そしてこのような環境があることが、アメリカ人は人からどう思われるかより自分が何をしたいかを大切にしているところに繋がっているように感じました。

アメリカで過ごした日々は、私に英語を話す楽しさも教えてくれました。日本での生活では英語を勉強していてもそれを使う相手は母国語が英語である英語の先生や同じクラスを受講している日本人です。私は大学で途上国や開発と環境のバランスなど持続可能な国際社会の姿について学んでおり、海外についての文献を読む機会が多くあります。今まで、資料を通してしか知り得なかったことがアメリカでは、母国語の異なるそれぞれの国から来ている留学生の友人と直接対話を通して知ること、感じることを嬉しく思いました。多民族国家であるアメリカで、英語という言語のツールを通して母国語が英語ではない人ともコミュニケーションをとれるという些細なことに感動させられました。そしてこの経験は、私の語学力を磨く上でのモチベーションに今でも大きく影響しています。

私は留学生活中、様々な課外活動に参加しました。フィンドレーは都市の大学に比べて留学生は少なく、留学生に慣れていない現地の学生が多くいました。特に日本人は他国の留学生と比べても人数が多いわけではなかったのも、少しでも多くの人が日本や埼玉のことを知ってもらいたいという思いと埼玉県親善大使という責任感から学内外関わらず多くのアクティビティに参加していました。留学生活が終わった今振り返ってみると、慣れない地で言葉も通じず、授業についていくことや課題をこなすことに必死になっている中、ボランティア活動のための準備を重ねていくことは決して簡単ではありませんでした。特に、老人ホームからはじめた演奏活動は、個人的な演奏活動やギターとのセッション、曲から楽譜をおこすことなど初めてのことが多く不安も募り、演奏する際は毎回非常に緊張していました。私がボランティアを通して関わった人たちの心にどのくらい印象を残すことができたかはわかりませんが、後日お礼として頂いたお手紙や、温かい言葉から私と会う前より少しでも日本や埼玉を身近に感じて貰えたような気がして大変嬉しく思いました。そして、年度末にフィンドレー大学の川村先生に、「徳

永さんを見てみると、やはり埼玉とこうやって関係を結んでいることは意味があるな、とつくづく思いました。」と言って頂くことができたこと、また大学から現地での活動を評価されて Friends of Findlay という賞を頂くことができたことを非常に光栄に思います。私がこのような活動をするにあたってやりたいと言えばやらせてくれる環境があったのは、協力してくださった先生や職員の方の存在があったからです。私をサポートしてくれた方々、様々なチャンスをごくださった方々に、ただただ感謝の気持ちでいっぱいです。

最後になりましたが、私を奨学生として選んでくださった埼玉県国際課の皆さまとフィンドレー大学の川村先生をはじめ、友人、家族、フィンドレー大学の皆様、私の在籍研究会の教授、武貞先生を含む私を支えてくれた全ての方々に心より感謝申し上げます。埼玉県の親善大使としてフィンドレー大学で学べたことを誇りに、そして幸せに思います。アメリカでは素敵な出会いにたくさん巡り合うことができ、先生や友人は私に大切な思い出をくれました。留学生活で得たものは、私の人生の大きな財産に他ならないです。アメリカで学んだことをいつも心に留め、出会えた人との繋がりをこれからも大切に、国際協力に貢献できる人材になれるようこれからも努めてまいります。本当にありがとうございました。

---

以下、月々の報告書には載せきれなかった写真で、本報告書の終わりとさせていただきます。



今年度最後の Funday Sunday で演奏させて頂きました。



学内にあるカフェは天井が窓になっていて空を見渡せる素敵なお場所でした。



寒い冬に勉強するときのお気に入りの場所です。



友人が度々自国の料理を振る舞ってくれました。



氷点下の中、私とハウスメイトでアイスを買いにいってよく食べていました。本当においしかったです！！



Friend of Findlay を受賞したときの写真です。



大学の目にあるカフェです。Findlay の学生はここで勉強している人も多いです。